

筑波大学向け寄付講座の概要

筑波大学では、1977年(昭和52年)に我が国の大学としては先駆けとなる「環境科学研究科」を大学院修士課程として開設するなど、環境に関する教育と研究の先鞭をつける取組みを行って来ました。その後、遺伝子研究やそれを活用するバイオ技術の急速な発展に基づく学問領域の広がりを受けて、生命科学と環境科学の融合を図り、現在、学部レベルでは生命環境群、大学院では生命環境科学研究科へと改組・発展させ、一層の環境研究と教育の充実を図っています。本学環境教育の特徴として、多様な学問分野を融合する取組みを行い、いわゆる理学、工学、農学、医学、人文科学の基盤に立った融合型の科学として環境教育を位置づけ充実させて来ています。

1. 講義内容

干ばつ、異常気象、海面水位の上昇、感染症の拡大、生物種の絶滅などが世界各地で頻発し、気候の大きな変動を実感する災害や地球環境の変化が年々増大している中で、2015年(平成27年)12月のパリでのCOP21(国連気候変動枠組条約第21回締約国会議)では「パリ協定」が締結され、現在社会が抱える気候変動に対して全地球規模で取組むことで合意がなされました。

この様な現状を踏まえて、本寄付講座では、以下の講義を開講します。

①寄付講義Ⅰ「地球環境変動と地球規模課題の科学論」(前期・春学期、講義1単位、「総合科目Ⅲ」)

～受講者定員 150名程度(最大250名まで)、1講義75分×10回

- ・国連が設定した「国際社会が取組む地球規模課題(Sustainable Developmental Goals)を導入において紹介し、現代社会が直面する地球規模の環境問題について問題意識を学生と共有します。
- ・また、大気、海洋、陸上環境に大まかに区分けし、それぞれの環境領域で直面する課題について、学術的側面から専門家・研究者の講義による解説を行います。

②寄付講義Ⅱ「環境変動影響と持続可能社会構築の科学技術論」(後期・秋学期、講義1単位、「総合科目Ⅲ」)

～受講者定員 150名程度(最大250名まで)、1講義75分×10回

- ・地球環境課題・問題の現状の理解を基盤に、その課題・問題を具体的にどのように解決して行くかを考え、どの様な科学技術の開発と発展が有効であるかを学び、「問題解決の方策」を理解する必要があります。そのため、環境修復に有効な科学技術の現状を理解させることも非常に有意義であり、アカデミアや国際機関、民間企業、NPOなど、国際社会において環境問題や持続可能社会の構築に貢献している科学技術を紹介し、それらに対する理解を深めるための講義を行います。

③実習科目(実験)「生命環境科学実習A(実験・フィールドワーク)」(前期、春学期、実習1単位)

～受講者定員: 30名、1実習150分×10回(25時間分)

～実施場所: 筑波大学山岳科学センター〔菅平高原実験所(長野県菅平)、八ヶ岳演習林(長野県野辺山)、井川演習林(静岡県井川)のいずれか〕、若しくは筑波大学内の実験室及び周辺フィールド。

- ・上記講義受講し、更に理解を掘り下げたい受講者に対して、地球規模課題の解決に資する科学技術的側面的一端について、手や脳を駆使して経験させます。年度に応じて実施項目の変更を予定しています。

④実習科目(研修)「生命環境科学実習 B(研修、国内・海外)」(後期・秋学期、実習1単位)

～国内研修受講者定員: 10名、海外研修受講者定員: 5名

- ・上記講義を受講し、更に広い視点を社会に向け、地球規模課題の解決に資する知識、経験を現場研修によって強化するための実地の見学・視察、若しくはインターンシップの形態をとります。年度に応じて実施項目の変更を予定しています。

以上の様に、最先端研究拠点「筑波研究学園都市」の中核機関として、長年にわたって環境問題の研究や教育に取り組んで来た、筑波大学ならではの講義が期待出来る内容であります。

本寄付講座は、高学年(3・4年)の学部生対象の全学共通の講義として開講します。加えて、国内外から招聘した研究者や本学教授による、公開の国際シンポジウムや国内シンポジウムの開催が予定されるなど、本学生や一般市民に開かれたオープンな企画となっています。

2. 開講期間：平成30年度～平成32年度(3年間)

以上